

佳
作

「かのじよのなかみ」

今
尾
真
理
子

○ 道 路 (朝)

蟬の鳴き声。

沢山の高校生が暑そうにぞろぞろと歩いている。

その中に、東条春樹(17)と江藤夏美(17)が、話しながら歩いている。

夏美「それでね、一時間かかって、やっとウサギの形にみかんの皮が剥けたのー!」

と、携帯電話の画面を見せる。

東条、画面を覗き込んで、

東条「へー、すごいね」

と、感じ良く笑いかけるが明らかに作り笑い。

後ろから光永めぐみ(17)が歩いて来て東条に、

めぐみ「おはよう東条君」

東条「え、お、おはよう」

めぐみ、東条に笑顔向け、すぐに前を向いて先へ行く。

夏美「……光永さんと仲いいの?」

東条「いや、全然」

と、不思議そうにめぐみの後ろ姿を見ている。

夏美、めぐみの後ろ姿を訝しげに見ている。

女子1「なっちゃん!」

と、二人の後ろから走って来る。

夏美「あーおはよー!」

と、東条を見る。

東条「行ったら?」

夏美「じゃ、後で教室ねー」

笑顔で手を振り合う東条と夏美。

夏美と女子1、楽しそうに話しながら行ってしまう。

岡島洋(17)、東条の後ろから、

岡島「よお」

東条「おう」

夏美と女子1の後ろ姿を眺めながら、

岡島「かわいいねえ。って言つとかなきゃいけない人種だよなあ。どうよ。江藤さんとは」

東条「べつに、普通だよ」

岡島「気取ってんなよ。で? どうだった?」

東条「どうって?」

岡島「朝から言わせるー?」

東条、溜め息を吐いて、

東条「まだ手も握らせてもらってないよ」

岡島、笑って、

岡島「分かった。分かった。ま、江藤さんは

そうだよな。正直どこがいいの?」

東条「大学も、一緒のとこ目指してんだ」

岡島「うわっ。どっちが言い出したんだよ」

東条「なっちゃんだけど?」

岡島「一緒とこって、どこ行くんだよ」

東条「オレは別に、やりたい事とか無いから」

岡島「流されるねー。まあ、相手があいつならオレ

も流されたいけど」

と、前を歩いているめぐみを見る。

東条「? 光永?」

岡島「あいつはエロい」

東条「オレは嫌だな」

と、めぐみを見る。

岡島「何で?」

東条「たぶん嫌われてるから」

岡島「臆病だなあ。徹底的にピーマンになれよ」

東条「は?」

岡島「お前は どうせ流されまくりの頭すかすかなん

だから、嫌われてても食卓にどんどん顔出すと

こまでピーマンになりきれてってことだ」

東条「ぶっ殺すぞ」

岡島「殺すとかはお前にはできない。分かっている。

でもよお、光永が彼女と別れて付き合ってたって

言ったらどうせ付き合うんだろ?」

東条「付き合わねーよ」

岡島「おや、どうかな? さあどうすんだ?」

東条「どうするって……」

と、めぐみを見る。

岡島「無いから考えるな。英語の小テストのことを

考えとけよ」

と東条を蹴って先を歩く。

東条「痛ってーな」

と、岡島の横へ行つて脇腹を殴る。

岡島「子どもだねえお前は」

と、相手にせず歩いて行く。

東条「けっ」

と、すたすた歩いて行く。

○ 桜ヶ丘高校・校門前(朝)

東条と岡島が校門に入ろうとした時、めぐみ

が二人の前に立つ。

めぐみ「東条くん。お話があります」

東条「え、オレ?」

めぐみ「うん。ちょっといい?」

東条「え……オレ、何かしたかな?」

めぐみ「うん」

岡島、東条の肩を掴んで、めぐみに聞こえないように少し離れて小声で、

岡島「おい、これはもしかして、神がお前の優柔不断をお試しあそばすつもりなんじゃないのか？」

東条「はあ？」

岡島「先ほどオレが光永について話したのも、神に操られてのことだったのさ！」

東条「岡島、お前、頭大丈夫か？」

岡島、めぐみの方に振り返って、ニヤニヤしながら、

岡島「じゃ、アタシ先行ってるわねえー」

東条「ばーか」

めぐみ「こっち来て」

と、東条の腕を引っ張る。

東条「あ、ちよっと」

戸惑っている東条。

○ 同・体育館裏（朝）

めぐみに連れられてやって来る東条。

手を放すめぐみ。

めぐみ「いろいろ場所考えたんだけど、結局ベタなとこにしちゃった」

東条、困惑してめぐみを見ている。

東条「……」

めぐみ「あたしね、今日で転校しちゃうんだ」

東条「え？ そ、そうなんだ。……どこに？」

めぐみ「大阪。おみやげ買ってくるね」

東条「うん。……って、引っ越すんでしょ？」

めぐみ「ボケですやん」

と、東条の肩を押す。

東条「あ、ああ……」

めぐみ、何か言いたげに東条をいたずらっぽく笑顔で見ている。

東条「あの、で、話って？」

めぐみ「告白」

東条「告白って、その……」

めぐみ「そ。愛の告白。照れるー」

と、東条をバンバン叩く。

東条「痛たた。いや、けど、その」

めぐみ「分かってるって。東条くんには江藤さんがいるもんね」

東条「ああ、いや……。いや、いやってことはないか」

めぐみ「いいのいいのいの！ 今更、付き合いたいとかじゃないんだ。私だって遠距離恋愛なんて無理だもん」

東条「あ、そうなんだ」

めぐみ「ただね、今日だけ、あたしのこと見て欲しいなーって思ってる」

東条「……」

めぐみ「ダメ？」

東条「夏美、同じクラスだし……。妙な心配させたらまずいし」

めぐみ「うまくやってよ。一生浮気せずに生きてくつもりなの？」

東条「いや、それは……」

めぐみ「これくらいのこと、これから何度もあるよ」

と、東条にキスをする。

東条「！」

めぐみ、東条を見て、

めぐみ「こんなことも、私は明日にはいなくなるんだし、無かったことにできるよ」

東条を見つめて、

めぐみ「無かったことにしてあげる」

東条「……」

と、思わず頷く。

めぐみ「じゃあ、今日は私のことだけ見てくれる？」

東条「……」

と頷く。

めぐみ「本当かなあ」

と、東条に顔を近づける。

めぐみ「今日しか無いんだよ。ちゃんと約束守れる？」

東条「……守れるよ」

東条とめぐみ、見つめ合う。

めぐみ「やっぱ信用できないなあ。よし、こうしよう」

と、スカートの中に手を入れて、下着を脱ぐ。

東条「おい、ちよっと！ 何してんだよ！」

めぐみ、東条の背負っているリュックサックを開け、脱いだ下着を入れる。

東条「え、何？」

めぐみ、東条の背後から、東条の肩に手を置いて耳元に囁く。

めぐみ「今日一日、預かって」

東条、めぐみを見る。

めぐみ、いたずらっぽく笑い、去る。

めぐみを唾然として見ている東条。

東条、背負っているリュックサックを肩から

下ろし、中を覗く。
教科書やノートと、めぐみの下着。
慌てて、奥に下着を押し込む東条。
胸に手を当てて、深呼吸をする東条。

○ 同・二年B組(朝)

生徒達、それぞれの友人と話している。
騒がしい教室。その中に、女子1と話している
夏美、一人で漫画を読んでいる岡島、窓際
で頬杖をついて、ドアの方を見ているめぐみ
がいる。

ぼんやりした顔で入って来る東条。

夏美、東条に気付き、

夏美「春樹！」

と呼ぶが東条はめぐみしか見ていない。

東条に、静かに微笑むめぐみ。

東条、めぐみのスカートに目をやる。

スカートを少し捲り上げる素振りを見せるめ
ぐみ。東条、思わず目を逸らす。

読んでいる漫画本の陰から東条の様子を観察
している岡島。

夏美、なんとなく東条とめぐみを見ている。

夏美「？」

と、怪訝な表情。

めぐみ、窓の外に視線を移す。

岡島、東条に近付き、

岡島「おい、結局何だったんだよ。今お前、神に試
されてるのか？」

東条「うるせえよ」

岡島「友達だろ？」

東条「それより、光永さん、今日で転校するんだっ
てよ」

岡島「うそ！ 光永さん、今日で転校なの!」

と、めぐみを見る。

生徒全員が、めぐみに注目する。

めぐみ「……」

と、立ち上がり、

めぐみ「今日で転校なの。みんな、今までありがと
ね」

と、座る。

主に男子生徒達が口々に「さみしい」「びっ
くりー」などと言いつつ、更に騒がしくなる
教室内。

東条、めぐみの隣の席に座る。

めぐみ、東条に近付き、小さな声で、

めぐみ「教科書忘れたとき、貸してくれてありがと
ね」

東条、めぐみを見ず、リュックサックから教
科書やノートを出しながら、

東条「いや、どういたしまして」

めぐみ「……こっち見て。約束でしょ」

東条「あ、ああ」

と、めぐみを見る。

めぐみ「さっきは、江藤さんより先にあたしの方見
てくれて、嬉しかったな」

東条「そりゃあ……」

と、めぐみを見ながらリュックサックに手を入
れる。

東条「あ」

と、リュックサックの中を見る。下着を掴ん

でいる手。すぐに下着から手を放す東条。
めぐみ「今日一日、楽しみだね」

と、意味ありげに微笑み、足を組む。

東条、思わず愛想笑いをしてしまう。

夏美「？」

と、東条とめぐみを見ている。

○ 同・理科室

班別に実験をしている。

東条とめぐみは同じ班。

それぞれ顕微鏡を覗いているめぐみ、東条。

めぐみの向かいに座り、めぐみをぼんやり見
ている東条。

隣の班の岡島が、東条に近寄り、

岡島「教えてー。二人の間に何があったのー」

東条「何もねえよ」

と、顕微鏡を覗く。

岡島「けどお前今日、光永さん見過ぎだよ？」

東条「変なこと言うなよ。なっちゃんに誤解される
と面倒だろ」

めぐみ「東条くん」

東条「え？」

めぐみ「シャーペン、そっちまで転がってっちゃ
った。拾って？」

東条「あ、ああ」

と、かがむ。

シャーペンを掴み、ふと顔を上げると、目
の前にめぐみの足。

少し開くめぐみの足。

目が離せない東条。

めぐみが、ひょっこり顔を見せる。
焦って立ち上がりうとして、机に頭をぶつける東条。

東条「いってっ」

めぐみ「大丈夫？」

と、机の下に入って東条の頭を触る。

東条「！」

と、また机に頭をぶつける。

めぐみ「ふふふっ」

と、思わず笑う。

東条「……」

と、思わず愛想笑い。

少し離れた所から、東条を見ている夏美。

女子1「彼氏が浮気中だよ」

夏美「……何笑ってんのよ」

と、不機嫌な表情。

○ 同・廊下

一人で歩いているめぐみ。

夏美の声「光永さん！」

と、めぐみに駆け寄る。

めぐみ、立ち止まり、

めぐみ「何？」

夏美「さっき机の下で、春樹と何してたの？」

めぐみ「頭打って痛そうな顔が面白かったから見て

たの」

夏美「へ？」

めぐみ「キスでもしてると思ったんでしょ？」

夏美「そ、そんなことは考えてないけど」

めぐみ「ウソー。だったらわざわざ聞くかなあ」

夏美「朝から二人、なんかおかしいから気になって」
めぐみ、窓の下を見下ろす。

男子数名、男性教師が点々としている。

めぐみ「私、よく男の子との噂流されてさあ。あれ

もあれも、噂にされたことある」

夏美「……」

めぐみ「ま、それもいい思い出よね」

と夏美に微笑み、歩いて行く。

夏美、めぐみの後ろ姿を見ている。

女子1、やって来る。

女子1「お待たせ」

と、夏美の視線の先を見て、

女子1「？ 光永さんがどうかした？」

夏美、窓の下を見下ろして、

夏美「あれとも、あれとも付き合ってたんだって」

女子1「ウソー。すごっ」

夏美「経験が多い方が上だと思ってるのね。バカな

女。下品よ。私は絶対軽いのは嫌っ！」

女子1「でもなっちゃんだって、東条君とキスくら

いしたんでしょ？」

夏美「ちよつと、やめてよ。そういうことしてこな

さそうだから付き合ってるのに」

女子1「確かに、気が弱そうだもんね」

夏美「彼氏がいなのはカッコ悪いし、まあまあ顔

はいいし、ちょうどいいの。春樹って」

と、笑う。

○ 同・二年B組

英単語の小テストの採点をしている生徒たち。
英語教師「よし、じゃあ採点したら隣の人に返せ」

めぐみ、笑顔で東条に小テストを返す。
めぐみ「はいっ」

東条、めぐみに小テストを渡しながら自分の

テストを受け取る。

東条「！」

小テストの点数の横に『好き』と書いてある。

めぐみを見る東条。

英語教師「よし、じゃあ後ろから回収！」

東条「え、あ」

東条の最後列の男子1が、テストを集めに来

る。東条、テストをとりあえず裏返しにし、

東条「え、ええと」

戸惑っている東条を無視し、裏返しのままテ

ストを集める男子1。

東条「あっ」

東条を笑顔で見ているめぐみ。

めぐみ「びっくりした？」

東条「やめてくれよう」

と、机に伏せる。

めぐみ「やだ。やめない」

東条「何なんだよ」

めぐみ、嬉しそうに東条を見ている。

○ 同・外観

チャイムが鳴る。

○ 同・運動場・サッカーコート

男子はサッカーの授業中。

女子は少し離れた所でバレーボール。

東条、試合中だがほっと息をつく。

東条「やっと落ち着いた……」

男子2「東条、頼むー!」

東条「え?」

東条の頭に向かって飛んで来るサッカーボール。

ボールが東条の頭にぶつかる。

うずくまる東条。

東条「何なんだ一体……」

と、女子の方を見る。

○ 同・同・バレーボールコート

膝丈のジャージを履いてバレーボールをしているめぐみ。

めぐみの下半身。

○ 同・同・サッカーコート

東条、うずくまりながら、

東条「あいつ、よく平気だな」

○ 同・同・バレーコート

ふと、サッカーコートでうずくまっている東条を見るめぐみ。

めぐみ、サッカーコートに向けて走り出す。

女子2「ちょっとお、光永さん?」

めぐみの後ろ姿を見ている夏美。

○ 同・同・サッカーコート

うずくまっついていて漸く立ち上がった東条にめぐみが駆け寄る。

めぐみ「東条くん!」

東条「え?」

めぐみ「大丈夫?」

東条「おい、授業中だから」

めぐみがコートにすることに気付いた男子たち、立ち止まる。

体育教師「おい光永、何やってる!」

めぐみ「私、保健委員だから心配で」

体育教師「お、おお、そうか」

男子2「ええっ!? それで通用するわけ」

めぐみ「東条くん、大丈夫?」

東条「うん、もう、大丈夫。つーか、最初からどうもないし」

めぐみ「そう?じゃあ、私行くね」

と、手をひらひら振ってバレーコートに戻る。

岡島、東条に駆け寄り、

岡島「おい、どうなってんだよ。友達の助けが必要なら言えよ?」

と、楽しそう。

東条「オレって相当子どもだと思われてんだな」

と、めぐみの後ろ姿を見る。

その先のバレーコートにいる夏美と目が合う

東条。

東条、夏美に愛想笑い。

夏美、目を逸らす。

岡島、それを見ていて、

岡島「ジェーラーシ」

東条「……」

○ 同・女子更衣室

着替えをしている女子生徒たち。

女子生徒たち、めぐみを見ている。

夏美、めぐみに近付き、

夏美「ねえ、さっきの何なの?」

めぐみ、とぼけた様子で、

めぐみ「私、保健委員だから」

夏美「そういうの、女には通用しないよ」

めぐみ「……女だってえ」

夏美「ねえ、何で春樹なの」

めぐみ「……」

夏美「ねえ!」

めぐみ「……それは、東条君に言うことだから」

夏美「何で人の物に手を出すのよ!」

めぐみ「選択肢のひとつになっただけよ」

夏美「最低ね!」

めぐみ「いいじゃん。江藤さんだって最低だから」

夏美「え?」

めぐみ「知ってるんだからね。私の噂流してるの、

江藤さんだって」

夏美「は?何それ」

めぐみ「でも、東条君とのことは噂流していいよ」

夏美、めぐみの頬を平手打ちする。

めぐみ、夏美の頬を平手打ちする。

女子生徒たち、口々に「やめなよ」「光永さん、謝りなよ」などと言っている。

夏美、泣き出す。

女子生徒たち、「なっちゃん、大丈夫?」などと近寄る。

めぐみ「そういうのは女にも通用するんだ」

と、出て行く。

○ 同・男子更衣室

着替えている男子たち。

岡島「おい、詳しく話せよ」

東条「別に何もねえよ」

岡島「はあ？ みんな見てたんだぞ」

と、全員に向かつて、

岡島「みんなも聞きたいよなあ!」

口々に「おう」「言えよ東条」などと言う男子たち。

東条「ああもう!」

と、シャツのボタンをかけないまま荷物を持ち、出て行く。

と、シャツのボタンをかけないまま荷物を持ち、出て行く。

○ 同・更衣室前・廊下

東条、更衣室から出て来て行く方向を見ると、

めぐみの後ろ姿が見える。

東条、周囲に誰もいないのを確かめて、めぐみを追う。

みを追う。

東条「おい!」

めぐみ、振り返って笑顔になる。

東条「何なんだよさつきは？ あんなことしたら噂になるだろ?」

めぐみ「ボタンがちゃんとできてないですよ」

と、東条のシャツのボタンに触れる。

東条「あ、ああ……」

すでに留めてあるボタンを外しているめぐみ。

めぐみ「お、おい!」

めぐみ、笑顔で東条にキスをして去る。

めぐみの後ろ姿を見ている東条。

めぐみの後ろ姿を見ている東条。

○ 同・廊下

女子1、2と歩いている夏美。

女子1「ねえ、いいの？ 光永さんのことほっといて」

夏美「……」

と、怒った表情。

女子1「ま、明日にはいなくなるのか」

女子2「けど、死ぬわけじゃないからねえ」

夏美「……」

女子1「こっそり遠距離恋愛でもされちゃったらどうすんの?」

夏美「……」

と、歩いている。

女子1「ちよつとなつちゃん、キャラ崩壊してるから。笑顔笑顔」

夏美、無視して歩いている。

女子1と女子2、顔を見合わせる。

夏美、無視して歩いている。

女子1と女子2、顔を見合わせる。

○ 同・二年B組

古典の授業中。

類杖をついて、ぼんやりめぐみを見ている東条。

古典教師「たまの〜お〜よ〜」

めぐみ、東条に笑いかける。

古典教師「たえ〜なば〜たえ〜ね〜」

目を逸らし、反対側を見る東条。

古典教師「なが〜ら〜えば〜」

東条を見ていた、少し離れた席の夏美と目が合う。

古典教師「しの〜ぶる〜こ〜と〜の〜」

と、座る。

古典教師「しの〜ぶる〜こ〜と〜の〜」

ゆつくりと夏美から目を逸らす東条。

古典教師「よわ〜り〜も〜ぞ〜する〜」

東条、頭を抱えている。

古典教師「ではこの句の意味を……江藤」

夏美「はい」

と立ち、めぐみを見ながら、

夏美「絶えるならばいつそ、この命、絶えてしまえ。このまま生きているとこの恋を忍ぶ気持ちが弱

って、みんなに知られてしまいそうだ……です」

めぐみ、東条にだけ分かる声の大きさで、

めぐみ「わかる〜」

東条、めぐみを見無視している。

古典教師「そう、そう!」

と、『忍ぶる恋』と殴り書きする。

古典教師「では次の行の句の訳を……今日は7月17

日だから24番、光永!」

めぐみ「え? はい、はい」

と、立つ。

めぐみ「あの人の気持ちは、いつまでも続くのだから」

めぐみ「あの人の気持ちは、いつまでも続くのだから」

うか」

一点を見つめて聞いている夏美。

めぐみ「この幸せは長く続くのだろうか」

めぐみ「この幸せは長く続くのだろうか」

めぐみ「乱れたこの黒髪のように、私の心は思い悩んでいる」

と、座る。

古典教師「正解!」

と、黒板に『永からむ』と殴り書きする。

めぐみ「江藤さんのこと、泣かせちゃダメだぞ」

と、東条に言う。

と、東条に言う。

東条、心底困った表情。

○ 同・外観

チャイムの音。

夏美の声「春樹!? どうしたの!」

○ 同・廊下

夏美の腕を引っ張って足早に歩いている東条。

○ 同・とある教室の前・廊下

東条と夏美以外誰もいない。

夏美「どうしたの?」

東条「……」

と、夏美を見ていて、突然キスをする。

夏美、驚いて東条を突き飛ばす。

夏美「何!? 何なの!」

東条「……好きだから」

夏美「は!? だからって、こんなこと急に」

東条「いいだろ!? 好きなんだから」

夏美「今日、おかしいよ春樹」

と走り去る。

東条、立ち尽くしている。

遠くから、めぐみが歩いて来ることに気付く

東条。

東条「……何なんだよ」

めぐみ、東条に向かって歩いて来る。

東条「光永はいいよな! 明日には関係ないんだか

ら! でもオレは違う」

めぐみ、東条に向かって歩いて来る。

東条「何でああいう、疑われるようなことしたんだ

よ……」

めぐみ、東条の前に立つ。

東条「話が違うだろ!」

めぐみ、東条を見ている。

東条「そもそも何でオレなんだよ……」

めぐみ「そんなに今の環境が大事なの?」

東条「え?」

めぐみ「自分は流されるまま楽に生きてるだけだっ

て、よく岡島君に言ってるのに。そんなに、適

当に手に入れた生活が大事?」

東条「……オレは、自分の状況に興味は無いよ。け

ど生きていかないといけないからね。こんな生

活でも無くなったら一からやり直すのは面倒だ

よ」

めぐみ「だったら、流されてなんかいいんだよ。

いつだってちゃんと、東条君の意思があるんだ

よ」

東条「無いよ。ただ面倒臭いだけだ。ちょっとオレ

のことをいい様に思い過ぎじゃない?」

めぐみ「流されてるのは私だって同じだよ。ただ隣

りの席になっただけなのに。岡島君と話してる

内容、隣りで盗み聞きしてただけなのに。ほと

んど話した事も無いのに東条君のことが気にな

ってしょうがないよ」

東条「きつと、オレが暗いから珍しいだけだよ。オ

レだって時々はキミみたいな華やかな子が気にな

ったりするけど、ただの憧れだって気付くん

だ。付き合いたいんじゃない。なりたいたけな

んだって」

めぐみ「ほら。今だって流されてるなら私のこと好

きになったっていいのに、そうやってないのは自分で選んでるからでしょ?」

東条「キミを好きになるのは面倒だからだよ」

めぐみ「私は東条君になりたいわけじゃないよ」

東条「確かにさっきのはちよつとうぬばれてたけど」

めぐみ「東条君がしてた楽しかった話も、悲しかった話も、全部、気持ちが分かった。聞いててす

つきりしたんだよ」

東条、めぐみを見ている。

○ (回想) 同・二年B組

東条と岡島、話している。

東条「いや、くだらなくねえだろ? 友達が手袋持

ってないのに自分が持つてるからって自分だけ

できねえだろ」

岡島「いや、すればいいし。意味わかんねえ。キモ

つ。つーか今夏なのに何でそんな話?」

それを隣りで聞いて、密かに笑っているめぐ

み。

○ 同・とある教室の前・廊下

めぐみを見ている東条。

めぐみ「私はね、ずっと一緒にいて、東条君に共感

してたいんだよ」

東条、困った顔でめぐみを見つめる。

チャイムが鳴る。

東条「あ」

めぐみ「どうする? 戻る?」

東条「戻らないわけないだろ」

めぐみ「何で?」

東条「何でって……。サボる意味が無いだろ」

めぐみ「何で？ もっと話そうよ」

東条「二人でサボったら明日から周りの目が気にな
ってやってけないよ。光永は明日からいなくな
るんだから関係ないだろうけど」

めぐみ「……明日からも私がいるならサボれるの？」

東条「え？」

めぐみ「転校、やめてあげようか？」

東条「……そんなこと無理でしょ」

めぐみ「できるよ。だって、ウソなんだから」

東条「え!？」

めぐみ、東条に微笑む。

蝉の鳴き声。

○ 同・二年B組

授業中。

空いているめぐみと東条の席を、眉間に皺を

寄せて見ている夏美。

○ 同・裏庭

木陰で、足を投げ出し、フェンスにもたれて

座っている東条とめぐみ。

めぐみ「楽しい？」

東条「時間が戻せるなら、教室に行ってるな」

めぐみ「楽しくないの？」

東条「楽しいよ。けど、時間を戻して無かったこと
にできるなら、もっといい思い出になるだろう
なと思って」

めぐみ「明日から、ううん。次の時間から、味方は
お互いだけだよ」

東条、体育座りをして、膝に顎を付ける。

めぐみ「怖いんだ」

東条「……」

めぐみ「正直でいいんじゃない？」

と、東条の髪をくしゃくしゃにする。

東条、ふっと笑う。

東条「よくあんなウソ、思いついたね。転校」

めぐみ「女は怖いでしょ？」

東条「怖いよ」

めぐみ「でも、それだけ思われてるってことだよ」

と、東条の肩を抱き寄せて微笑み、胸ポケッ

トからメモを取り出し、東条に渡す。

東条「？」

と、メモを見る。

メモには、『玉の緒よ 絶えなば絶えね な
がらへば 忍ぶことの 弱りもぞする め
ぐみ』と書かれている。

東条「これ、さっきの」

めぐみ「頭のいい子は応用も早いのだよキミ」

東条、ふっと笑う。

めぐみ「私は死にたくないもん。一緒に生きようぜ」

と、東条の顔を覗き込む。

東条「……」

と、メモを見ている。

女子1の声「ええっ！ キス!？」

○ 同・二年B組

弁当を食べている生徒たち。

その中にいる夏美、女子1、女子2。

夏美、わざとらしく思い詰めたような表情で、

夏美「うん……。さっき、授業が始まる前に」

女子1「良かったね。心配したんだよお」

女子2「で、どうしたの？」

夏美「突き飛ばしちゃった」

女子1「え!？」

夏美「だって、びっくりして。私、光永さんみたい

に慣れてないし」

女子1「そういうええさっき、何で二人ともいなかった

んだろ」

女子2「今もね」

夏美「私が突き飛ばしたから、光永さんの方にいつ

ちゃったのかな」

女子1「そんなことないよ!」

女子2「もうキスもしたんだから、なっちゃんひと

すじだって!」

女子1「そうそう、なっちゃんのキスと光永さんの

キスじゃ、重みが違うんだから!」

夏美「そうかなあ?」

女子1「そうだよ!」

夏美「確かに、光永さんってよくいろんな人とキス

してるもんね」

女子2「え、そうなの？」

夏美「え、知らないの？」

女子2「ま、そうだとは思ってたけど」

夏美「今の、一応内緒ね?」

女子1「みんな知ってるでしょ。とにかく、東条君
がなっちゃんとは別れるとか言って来たら私たち
が文句言ってあげるから!」

女子2「うん!」

女子1「なっちゃんより女らしくて可愛い子なんて

いないんだから!」

夏美、頷く。そして、真顔になる。

○ 同・屋上

蝉の鳴き声。

日陰でパンを食べているめぐみと東条。

めぐみ「暑いねー」

東条「もうすぐ、昼休み終わるね」

めぐみ「やだー!」

と、空に向かって叫ぶ。

○ 同・二年B組

弁当を食べている生徒たち。

男子3「やべえ、財布がどこにも無い!」

男子4「マジ? やべえじゃん」

男子3「やべえよ」

男子4「いつまではあったんだよ」

男子3「知らねえよ。今見たらねえんだから」

男子4「みんな! 持ち物検査してみよう! いい

よな!」

夏美、密かに笑みを浮かべる。

○ 同・屋上

空を見上げているめぐみと東条。

めぐみ「教室、戻らないとね!」

東条「……」

めぐみ「緊張する?」

東条「そりゃあね」

めぐみ「芸能人みたいに、時間差で行こう」

東条「意味ある?」

○ 同・二年B組

鞆を順番に見ていく男子3。

夏美、めぐみの席に掛けられた鞆を見て笑う。

男子3、東条の席に来て、

男子3「あれ、東条、まだ戻って来てないのか?」

岡島、東条の席まで来て、

岡島「親友として、こいつの鞆を勝手に見ることを

許可するよ。ぜってー犯人じゃないしな」

と、東条のリュックを取って開ける。

○ 同・屋上

めぐみ、東条の顔を覗き込み、

めぐみ「じゃあ一緒に教室行く?」

東条「いや、それは」

めぐみ「もう。優柔不断だなあ。じゃ、先に行くよ」

と、立ち上がる。

めぐみ、東条を見る。

東条「?」

めぐみ「危険な位置関係」

と、少しスカートの裾をめくって笑う。

東条、思い出したように、

東条「あ」

めぐみ「忘れてたの?」

東条「うん」

めぐみ「そういうところが好きだぞ」

と、屈んで東条に笑いかける。

東条「い、いつまでもそういうのにオレが戸惑うと

思ったら大間違いだから」

と、目を逸らす。

めぐみ「仲間割れしないの。味方はお互いだけなんだから」

○ 同・二年B組

東条の鞆の中を見て固まる岡島。

男子3「おい、どうしたんだよ」

岡島、鞆を隠し、

岡島「い、いや、やつは財布なんか無かったぜ」

男子3「怪し過ぎるだろ。貸せよ」

と、東条の鞆を岡島から取る。

夏美「?」

と、そのやり取りを見ている。

○ 同・屋上

めぐみ、立ち上がり、

めぐみ「じゃあ、教室でね」

と、去る。

東条「……」

と、突然、

東条「うわー」

と、膝に額を付けて辛そうな表情。

東条「やべえよなあ。どうすんだよ」

と、顔を伏せたまま。

○ 同・二年B組前・廊下

めぐみ、入ろうとする。

男子3の声「何だよこれ!」

○ 同・二年B組

めぐみ、入って来る。

一瞬、生徒たちがめぐみに注目するが、視線は男子3の持つ下着にすぐ戻る。

めぐみ「！」

女子1「なっちゃん、こういうことかなあ」

夏美「……サイテー」

男子3「東条、変態だー」

岡島「何かの間違いだ！ たぶん、携帯と母ちゃんのパンツを間違っちゃったんだよ。誰にでもあるだろ？ な!?」

ざわついている生徒たち。

めぐみと夏美、目が合う。

夏美、めぐみに近付き、

夏美「春樹といたの？」

めぐみ、夏美を無視して、男子3の持っている下着を取る。

男子3「光永。何だよ」

めぐみ「私が入れたの」

夏美「!?」

東条、教室に入ってくる。

夏美「春樹！」

東条、めぐみがついている下着を見て驚く。

めぐみ、クラス全員に、

めぐみ「私が東条君の鞆に入れたんです。私、ずっと東条君のことが好きだったから。転校してもずっと覚えて欲しくて無理矢理こんなことしちゃったの。東条君、ごめんね」

女子1「引くわー」

「最低」「下品」などと口々に言う女子たち。東条「……」

岡島「おい、どうすんだよ。神は、お前がどうするのか見ておられるぞ」

東条「ふざけんなよ」

岡島「悪い悪い」

と、真剣に、

岡島「逃げるなよ」

東条「分かっているよ。……」

男子3「東条。お前もすごいよ。江藤さんがいるのにさあ。このこと黙ってたんだろ」

東条、夏美を見る。

夏美「春樹、私はいいの。春樹が好きな人というのが、私は一番幸せだから」

めぐみ、夏美を冷めた表情で見る。

夏美も、めぐみを冷たい目で見える。

東条「……」

夏美「でも、春樹が本当に好きなのは私だよ？」

だって、さっきキスしてくれたもんね？」

東条「な……」

生徒たち、ざわつく。

夏美「光永さんにはからかわれてるだけだって分かっているんでしょ？」

と、潤んだ目で東条を見る。

東条「……」

女子1「私たちの大事ななっちゃんにキスしといて光永さんにいったら許さないよ！」

夏美「やめて！ いいの。ただ、私は春樹を信じてる。さっきのキスは、私を思ってくれてるキスだった」

と、潤んだ目で東条を見ている。

東条、溜め息を吐く。

夏美「ゴールデンウィークに入る前、たどたどしく告白してくれたこと、忘れてないよ。春樹」

東条「え」

○（回想）同・体育館裏

立っている東条と夏美。

夏美「東条君。私、東条君のこと好き」

東条「え？ 何で？」

夏美「優しいから」

東条「……そうかな。気が弱いだけだよ」

夏美「ううん。優しいってのは、強いってことだよ。私は弱いから東条君のこと尊敬する。私と、付き合ってくれる？」

と、潤んだ表情で東条を見ている。

○ 同・二年B組

チャイムが鳴る。

東条「……」

夏美「春樹は優しいから、私を裏切ったりしないよ？ だって、キスしたんだもんね」

東条、めぐみを見る。

数学教師が入ってくる。

数学教師「何だ？ どうした？」

男子3「あ、いや……東条が。いや、そうだ、それより僕の財布！ 僕の財布が無いんです！」

数学教師「何!？」

男子3「あと見てないのは、光永の鞆だけだ」

めぐみ「……」

と、鞆を取り、開ける。

めぐみ「……」

と、男物の財布を取り出す。

男子3「あった！」

めぐみを見てニヤリと笑う夏美。

驚いている東条。

女子1「人の男取る人はやる事が違うわ」

夏美「そんなこと言ったらかわいそうだよ」

男子3「江藤さん優しいな」

めぐみ「知らないよ私は！」

数学教師「光永、生徒指導室へ行きなさい」

めぐみ「だから、やってないんです！」

数学教師「言い訳は生徒指導室で聞く」

めぐみ「……」

と、怒って出口へ歩いて行く。

めぐみを目で追う東条。

数学教師「ちよつと待ってるように」

と、出て行く。

岡島、東条に、

岡島「かばってやれよ。マジで嫌われちゃうぞお前」

東条「ああ……」

と、真剣な表情。

○ 同・生徒指導室

誰もいない部屋。めぐみが一人で座っている。

しばらく不貞腐れていたが、反省文を書き始

めるめぐみ。

○ 同・二年B組

数学の授業中。

めぐみの席を見ている東条。

東条を見ている夏美。

○ 同・生徒指導室

反省文を裏返し、目を閉じるめぐみ。

○ 同・外観

チャイムの音。

○ 同・二年B組

教科書を机にしまっている夏美。

東条、教室を出て行く。

夏美、東条を見る。

○ 同・廊下

歩いている東条を追いかけて来る夏美。

夏美「春樹！」

東条、歩きながら振り返る。

夏美、東条の後ろを歩きながら、

夏美「光永さんのところに行くの？」

東条「うん」

夏美「何で!? 昨日まで何とも思ってたんだ

しょ!?」

東条、立ち止まり、

東条「さっきの、何だよあれ？」

夏美「え？」

東条「みんなの前で、キスしたとか告白されたとか」

夏美「だって」

東条「今更怒らないけど」

夏美「ウソ。怒ってる」

東条「怒ってないよ」

夏美「だって、光永さんの方に行っちゃうん

だよ？」

東条「怒ってるからじゃないよ」

夏美「だって、昨日まで何とも思ってた人を、

おかしいじゃない? 絶対、私への仕返し

だよ？」

東条「仕返しなんかじゃないよ」

夏美「絶対そう。みんなの前でキスのこと

って困らせたからだ」

と、泣き出す。

東条、溜め息を吐く。

周りを歩いている生徒たち、東条と夏美に注

目している。

東条「頼むよ。泣き止んでくれよ」

夏美「嫌。泣き止んだら光永さんのところ

に行くんでしょ!?」

東条「じゃあ、ずっと泣いてるつもり？」

夏美「二学期も三学期も来年も再来年もずーと泣

いてやるわよ。そしたらどこにも行かないで

しょ!?」

東条「そんな人と一緒にいたくないよ……」

夏美「だったら、どうすればいいのよー! 別れた

いならキスなんてしないでよー。ひどいじゃ

ない!」

周囲に見られている東条。

めぐみの声が蘇る。

めぐみの声「いつだってちゃんと、東条君の

意思があるんだよ」

泣いている夏美。

東条「……頼むから、泣くのをやめてくれよ!」

夏美、驚く。

東条「別れたいのにキスしたのは悪かったよ。ごめん。でももう、付き合えない」

夏美「……最悪！ 何様のつもりよ！ 大っきらい！ つまらない話ばかりしてさ、無理に笑ってあげてたんだからね!」

東条「だったらどうして付き合ったんだよ」

夏美「高二にもなって彼氏いないのカッコ悪いし、告白したら簡単にOKしそうなのが春樹だっただけ!」

東条「何だよそれ。じゃあ、ずっとオレのことバカにしてたのか!」

夏美「当たり前じゃない。あんたのことなんか本気で好きになれる要素、どこにも無いのが自分で分かんないの!? じゃあ、さよなら!」

と、走り去る。

東条「……」

と、歩き始める。

○ 同・生徒指導室

誰もいない部屋。

生徒指導の教師、入って来る。

生徒指導の教師、机の上の作文用紙を見る。

生徒指導の教師「何だこれは?」

と、しばらく読んで、

生徒指導の教師「……許してやるのも教師の仕事か」と、用紙を折り畳む。

○ 同・二年B組

日本史の授業中。

入って来るめぐみ。

めぐみに注目する生徒たち。

めぐみと東条、目が合う。

東条、めぐみから目を逸らす。

めぐみ、夏美を見る。夏美、めぐみを睨んでいる。

日本史教師「早く席に着け!」

めぐみ、東条を見たまま、自分の席へ向かう。席に着き、頬杖をついて東条を見るめぐみ。

東条、目だけでめぐみを見る。

めぐみ「ただいま」

東条「あ、ああ」

めぐみ「あれから、大丈夫だった?」

東条「ああ。……夏美と、別れた」

めぐみ「えっ!」

東条「今日あったことに流されたからじゃないよ。」

そうしたかったからだ」

めぐみ「そう。そっか」

東条「話が面白くないけど無理に笑ってたって言われた」

めぐみ、心配そうに東条を見ている。

東条「それ言われた時、光永のこと思い出したから、そんなにショックじゃなかったよ」

めぐみ「そっか。私、東条君の役に立てたんだね」

東条、めぐみに向かって静かに微笑む。

めぐみも微笑む。

○ 同・二年B組(夕)

ざわついている教室内。

帰り支度をしている生徒たち。

めぐみも帰り支度をしながら、

めぐみ「今日、楽しかったよ」

東条「……オレも」

めぐみ、微笑んで、

めぐみ「本当に、明日から別の学校に行けたらいいのに。色々巻き起こしちゃったから」

東条「みんな、明日びっくりするんじゃない? いるから」

めぐみ「そうだね」

東条「ああ」

めぐみ「じゃあね」

と、去ろうとする。

東条「あ、あのさあ」

と、携帯電話を取り出す。

めぐみ、振り返り、

めぐみ「何?」

東条「いや、急ぐ事ないか。また明日でいいや」

と、携帯電話を持ったまま手を振る。

めぐみ、微笑んで去って行く。

東条、めぐみを見ている。

○ 同・外観(朝)

蟬の声。

○ 同・二年B組(朝)

ざわついている生徒たち。

担任教師、入って来る。席に着く生徒たち。

担任教師「はい。休みの奴の隣の奴は手を挙げろ」

東条、めぐみの席を見る。

東条、手を挙げる。

担任教師「東条、光永は転校しただろ」

東条「えっ」

担任教師「何だ？　もうみんなに挨拶済ませたって言ってたぞ」

東条、めぐみの席を見る。

東条「そ、そうでした。忘れてました」

生徒たち、笑う。

めぐみの席を見る東条。

東条「……」

○ 同・裏庭

フェンスにもたれて座っている東条。

手には英語の小テストとめぐみが書いていた反省文。

点数の横に『好き』と書かれている。

反省文は『東条君へ』から始まる手紙になっており、『いい思い出になりました。ありがとうございました』で締められている。

ふっと笑って、目を閉じる東条。

蝉の鳴き声。

(終)